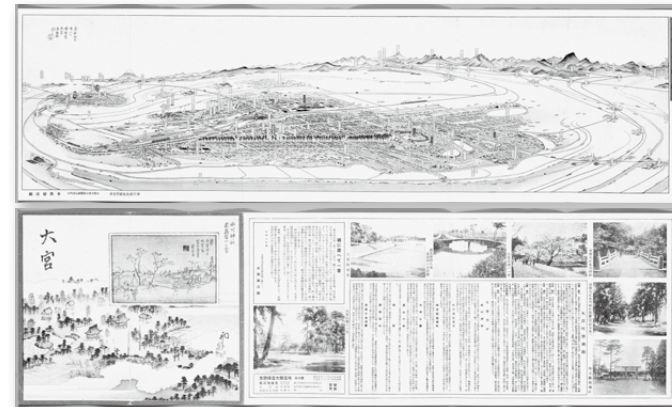


6月

「盆栽村100年に関する研究ノート⑤」
パンフレット「大宮」(吉田初三郎「大宮鳥瞰図」)

大宮盆栽村は令和7年に開村100周年を迎えました。大宮盆栽美術館でも10月3日から盆栽村100周年記念の特別展として、盆栽村の歴史を紹介する展覧会を予定しています。今号では、当館が展覧会に向けて新たに収集した盆栽村関係資料のなかから、パンフレット「大宮」を紹介します。



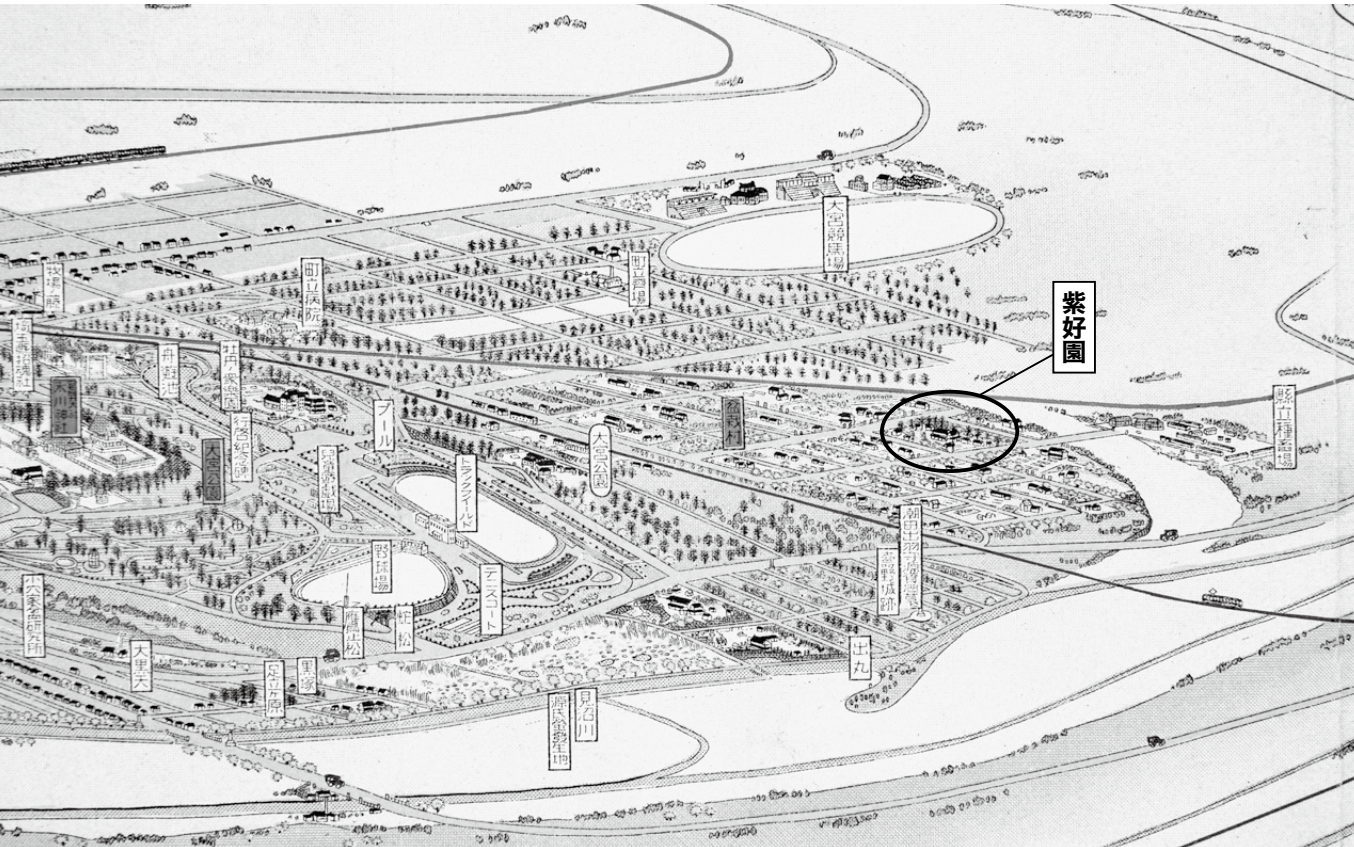
パンフレットは長辺530cm×短辺15.5cmの用紙を6折にした両面刷りの印刷折本で、昭和9年(1934)10月30日に埼玉県大宮保勝会が発行したものです。大宮保勝会「大宮公園の

維持管理の助成・大宮町及附近の開発史蹟の調査」※を目的とし、大宮町議会の決議を得て昭和6年(1931)に設立された会員の外郭団体です。この時代、鉄道交通網の発達に呼応した観光ブームが巻き起こり、自治体は観光開発に注力しました。大宮町の意向を反映した保勝会も、大宮駅に観光案内所を開設するなど精力的に活動しています。本葉の片面には「大宮町勢概観」と「名所旧跡」が単色刷りの写真入りで紹介されており、大宮町の魅力を宣伝するための広報媒体であったことがわかります。

そして最も目を引くのは、片面全面にフルカラーで刷られた吉田初三郎による鳥瞰図です。京都出身の吉田初三郎(1884-1955)は、空を飛び、鳥の目になって景色を俯瞰する鳥瞰図で一世風靡した商業画家です。大胆なデフォルメを加えたパノラマ地図が人気を博し、大正末期から昭和10年代は、省庁や自治体の依頼による鳥瞰図を盛んに描いています。

吉田初三郎の印刷折本には「絵に添えて一筆」と題する一文が定例で添えられ、作図背景を知るためのヒントを与えてくれます。本葉にもみえ、本図が昭和9年11月の昭和天皇陸軍特別大演習埼玉県行幸に際して作図されたことが推測できるほか、文末に「昭和九年秋 大宮公園盆栽村紫好園の離れにて 吉田初三郎」と記されています。初三郎の鳥瞰図は現地踏査や取材をもとに下図が描かれたとされていますが、「大宮」の作図の前後に、初三郎が盆栽村の料理旅館「紫好園」に滞在していたことが判明します。

これを踏まえて、鳥瞰図を眺めてみましょう。右上余白には「帝都郊外唯一之理想鏡 大宮鳥瞰図」と記され、海や川などの低地の上空から市街を俯瞰し、奥手に山々を望むという、初三郎の市街図によくみられる構図がとられています。実際の地理に照らすと、東から西方向に大宮の町を見下ろし、右奥に埼玉県の秩父連山や群馬県と長野県の名峰、左奥には富士山と東京湾が望めます。図の中心



には大宮の象徴である武蔵一之宮の氷川神社と大宮公園が配されており、老樹に覆われた長い氷川参道を効果的にとらえた構図となっています。

大宮公園に北接する盆栽村は、当時は「大宮町」ではなく、隣村の「大砂土村」に属していたため、本図では端方に位置しています。にもかかわらず、その風景がかなり詳細に描き込まれていることに注目しなければなりません。実景よりも大きく描かれた「紫好園」には、立派な二階建てと数棟の離れがみえます。さらに、紫好園の東側に接する清大園、西側の松籟園、南側の藤樹園などの盆栽園には、広い圃場に盆栽棚が並んでいる様子

も描かれています。碁盤目状の区画と道の本数も実景と同じで、周辺に常緑の針葉樹(赤松)が多く自生するなか、美しい街路樹に覆われた盆栽村が異彩を放っていた様子が伝わってきます。

ところで、初三郎の鳥瞰図では、地名や施設名称が短冊状の囲み枠のなかに表記されており、特筆すべきスポットは赤枠で示されています。本図では、「鉄道工場」「氷川神社」「大宮公園」「盆栽村」の4か所が赤枠の表示となり、大宮を代表するランドマークとして位置づけられています。大宮町に属していない「盆栽村」は、片面の「名所旧跡」に無い項目であるため、このような扱いは初三郎自身の見解にもとづくものであったとみられます。実際に盆栽村に宿泊し、村を拠点に周辺を探索し、スケッチに励んだ初三郎にとって、盆栽村の印象は鮮烈であったことでしょう。盆栽村から大宮公園、そして氷川神社は一続きの風致を有するエリアでした。本図は、実地に基づく鮮度ある空間感覚が投影された地図として貴重なものと言えます。

※1 東京市政調査会『日本都市年鑑』第4 昭和10年用 昭和9年(1934)